
トライアラー

夜上璃斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

トライアラー

【Nコード】

N4659R

【作者名】

夜上璃斗

【あらすじ】

世界が一度崩壊して千年後。ある遺跡で出会った女の子。彼女との出会いが若き考古学者の卵と学友の少女は、女の子に隠された秘密を探るべく動き出す。そして世界に隠された謎という名の歯車を回り始めた。

0・ある遺跡の中で

『ソレ』を見た瞬間、彼は絶句した。

次に大きく目を見開いてから眼鏡を外して眉間を指で軽くマツサ
ージし、そして大きく深呼吸。

ついでにマツサージでつぶった目蓋に一度力を加えてから、思わ
ず何かの擬音を付けても良いくらい力いっぱい『ソレ』に向けて、
充血してしまった眼を見開いた。

「……………」

だが結果は変わらず。

再び絶句という感情も理性もついてこれないただ真っ白な思考の
渦の中に、己を叩き落しただけだった。

「いや、ちょっと待って……」

誰に何を待てというのかはともかく、ようやく復帰してくれた意
識が、再び眩暈と頭痛でどこか遠くにスキップでもしながら飛んで
いつてしまいそうになるのを必死に押し留めつつ、彼は『ソレ』に
困り果てた視線を投げかけた。

そんな複雑な感情が込められているとは露知らず、『ソレ』は不
思議そうに周囲を見回し、最後に彼を認識すると薄らとぎこちない
笑みを浮かべた。

反射的に笑顔を返す。

するとそんな反応が嬉しかったのか、笑みから硬さが抜けた気が
した。

（親の苦勞子知らず……だっけ？ それってこういう気持ちなのか

な？)

微妙に間違った諺を心の中で呟き、大きく溜息をつく。

どれだけ現実逃避しようとも、今日の前で起きている事は現実であり、逃げ出せない事実だ。現に『ソレ』は箱の中で上半身を起こし、天使の笑みを浮かべながら彼に小さな小さな手を差し出している。

「……どうしよう？」

差し出された小さな手を、握手よろしく握り締めて上下に振ってみる。

その動きが面白かったのか、『ソレ』は声を出して笑った。

両手を出してきたので、両方とも同じようにしてやると、それだけで楽しい笑い声が室内に響いた。

何とも可笑しなものだ。

百年以上人を遠ざけ、冷たく闇に沈み込んだ遺跡の一室が、笑顔と笑い声というそれだけの行為でこうも明るい空気に変貌させられるのか。

「まあ、仕方ない、のかな？」

繋いだ手を上下に振るだけではなく、回したり左右に振ったりと『ソレ』の関心を惹きつつ、嘆息する。

ただ少なくとも『ソレ』を無視してこの場を離れる選択肢は、彼の中に存在していなかった。

「一緒に、行こうか」

その言葉に、ソレは少しだけ小首を傾げた後、大きく満面の笑み

で頷いた。

0 ・ある遺跡の中で（後書き）

とりあえず見切り発車。作品への感想やご指摘がありましたら
どしお願いいたします。

1・ルシエとローラ

怒気を振りまいている。

自分で自覚はあれど、抑えられるものではない。

その証拠に、王立聖皇総合学院の廊下を踏みしめる足が前へ進む度に、怒りが膨張していくのが分かる。

そのせいか普段は太陽の光を反射し、天使の環が煌びやかに輝いているシルバーブロンドの髪もどこか色褪せて見えた。

「あのバカ、あのバカ、あのバカ、あのバカあー！」

廊下の角を曲がると、藍に黒を少し垂らしたような色調に、縁沿って五センチ程度内側に金色の一本の刺繍糸が縫われているブレザーと、細かいチェックのスカートが揺れる。

いつもは自信に溢れ、周囲から頼られる大きなエメラルドグリーンの瞳を限界まで吊り上げ、小さく花のような唇からは、瞳に同調するように悪態が零れ落ちていた。

そんな通常であれば人を寄せ付けない雰囲気しかない彼女だが、それでもすれ違ったびに人が振り返っていくのは、日常の行いと怒りですらアクセントになる整った端麗な容姿のおかげだろう。

ただその様子は日常茶飯事なので、彼女を振り返る視線は全てに共通して「またか」という感情が混ざっていた。

「よう、ローラ。今日も相変わらずだな！」

中にはその様子を面白がって、からかい口調で声をかける者も居たが、そんな輩には須らく殺気の籠った一瞥をプレゼントする。その反応もからかう対象なのか、後ろに流れて消えていく談笑に混じった甲高い笑い声が消えていく。

限界と思われていた目尻が更に鋭さを増した。

放課後の賑わいを見せる一般棟から、部活に精を出す逞しい掛け声がちらほらと聞こえ始めている校庭を眺めつつ、噴水のある中庭に抜ける事ができる渡り廊下を突っ切り、研究・部室棟へと入る。

人気はあるが騒がしさの感じられない一階奥にある階段を、一段飛ばしで一息に二階まで駆け上がると、ローラはそのままの勢いで、階段のすぐ傍にある考古学研究室に飛び込んだ。

「ルーシィ！」

すでに鬼の形相と化していたローラの来訪に、机の向こうで論文の執筆に励んでいたルシエはゆったりとした動作で顔を上げた。

日に焼けて赤茶色になった髪は手入れもされずに至る所が跳ねており、ローラより頭半分低い身長と童顔と相まって、彼女と同じ色調の制服に身を包んでいなければ、見た目は毎日外でヒロイックサーガごっこに花を咲かせる子供のようだ。

そんなルシエは、まるでいつも通りと言わんばかりにのんびりとした動作で片手を――。

「やあ。ローラ。今日も元気だね。それと、僕はルーシィじゃなくてルシエ……」

「そんな事はどうでもいいんですっ！ 貴方！ この一週間何処で何をしてたんですかつ！」

――上げる暇もなく、ローラは彼の目の前に来るや、挨拶すら中断させて、ルシエの額にすらりと細く真っ白な指を押し付けた。

「何処つて……書き置きしたじゃない」

しかしこちらにも慣れているのか、押し付けられた指を丁寧に除けると、指で書置きの内容を空中でなぞった。

「書置きいゝ？」

「うん。『一週間ほどサンシャ遺跡に行ってきます』って」

記憶違いと言う事はない。

一年程前だが、偶然見つけた文献に小さいながらもまだ手付かずと思われる遺跡を発見したルシエは、着の身着のまま遺跡に突貫し、ついでに罠に嵌り、更に餓死寸前で救出された経歴がある。

問題はその後で、救出されたルシエの病室に退院まで居座り、延々とローラが説教をし続けたのだ。

起きるとまず何故入院する羽目に陥ったのかを重箱の隅を突付く丁寧さで溢し、朝食を摂りながらルシエの無鉄砲さを説き、リハビリをしながらルシエの体力不足が原因で罠回避ができなかったと責め、寝る直前には報告・連絡・相談をの重要性を教授する。

さすがに辟易したルシエは、今後出かける際は必ず報告する事をローラに約束したのだ。

今回もそんなトラウマ認定がなされても問題がない経験の結果、飛び出しかけたところを必死に押し留め、自分の机に書き置きを残した……筈なのだが。

「こんなのが書置きっていうんですかー！」

どうやらローラにはお気に召さなかったらしい。

制服のポケットから取り出した紙を、机の上に激しく叩き付けると、そこに書かれていた文字を力いっぱい指差す。

そこまで怒られるような書き置きをしたかなあ？

心の中でごちつつ、書き置きを覗き込み……。

「ちゃんと書いてるじゃない」

そして懨然とした表情でローラに抗議した。

「ええ、ええ。確かに書いてるわ」

それに対して、静かに頷くローラ。

「但し、誰が古代文字で書いて読めるんですかー！」

「……おお」

「『おお』じゃないですっ！」

言われて納得。

確かにルシエの書き置きに書かれていた文字は、今から千数百年前に東大陸の一部で使われていた古代文字だった。

「いやあ。サンシャ遺跡を調べるのにちょうどこの時代の文字が必要で、辞書片手にしてたから」

「何で書き置き読むのに、丸二日もかけなくちゃいけないですか！」

「辞書あればすぐ読めるじゃない」

「私の専門は法律です！」

「でも読めたなら問題なかったんよね？」

ああ言えばこう言うーっ！

頭を抱えて叫ばなかった自分を褒めてやりたいと、感動すら覚える忍耐で最後の一線に踏み止まる。

深呼吸を二度ほど行い、せめて会話が可能な状態に心を落ち着ける。

（うん。大丈夫。もう大丈夫。私は普段通り。今は怒鳴るよりも何故こんな共通言語で書き置きを残さなかったのかを、沈着冷静にこの同級生であるルーシイに心行くまで問いただす事が重要な訳で。そのために幼い頃から慣れ親しんだ共通言語ではなく、習い始めてわずか半年にすら満たない極東の一部でしか使われた事のなかった言語を使用して書き置きするという、生まれてから今日までの成長の証である言葉を急ぎの場で使わないという謎の行為についての詳細説明を求め――）

「大体先生とか先輩に聞けばすぐ解決するのに、二日も解読にかけるなんて、ローラはお間抜けだなあ」

瞬間、極太のロープが皇宮騎士団で一、二を争う力自慢が綱引きをして、更に耐え切れずに破断でもしたような、純粹に耳を塞ぎたくなる巨大な音が室内に木霊した。

発生源はもちろんローラである。

「こっちは、二日間も、貴方の行方が、分からなくて、やきもきてたのよ！」

「ちょ……まっ！　ロー、ラ、くるっくるし……、しまっ……！」

そして音と同時に、ルシエは高速で激しく強制前後運動する物体と化した。

舌を噛みそうになりながらも必死にローラを止めるべく口を開くが、まともに言葉すら話させてくれない。

「もーっ！ 貴方は本当にどうしてそう！ 毎回毎回毎回人を心配させてーっ！」

「だが、ら……しまつて……しまつて……」

付け加えるなら、彼女の手は襟の内側を巻く形でしつかりと決まっているので、揺すられるたびにルシエの顔から血の気が引いている。

「大体、今回で何回目？ もしかしてルーシイってマゾ？ お説教されるのが好きなの？ ……それとも私の事嫌い？ 怒らせて楽しんでたりするの？」

次第に怒声の内容が怒りから愚痴に変貌し、ついでに釣り上がった眉はだんだんと下降線を辿り始めた。自分で愚痴りながら少々気分が落ち込み始めたらしい。それでも心と体は別問題で、揺する手は速度を緩めない。

ルシエの顔色と白目がそろそろ限界に差し掛かり始めた時、不意にローラの制服を何かが引っ張る感覚があった。

おや？ と動きを止め、徐に引っ張られた制服の方向に視線を落とすと。

「ダメ。るー、死んじゃう」

そこには七歳位のふわふわのシルバールブンドの髪のした見覚えのない小さな女の子が、大きなサファイヤブルーの団栗眼を涙で潤ませていた。

「えーっと？」

「ダメ……」

思わず少女をまじまじと見つめる。

見た目は七歳くらいか。初等部に入学しているかいないかという年齢だ。

だが少女が学院の生徒ではないのは服装を見れば分かる。と言うのも、少女は学院指定の制服を着ていないからだ。

学院——王立聖皇総合学院は初等部から高等部までの総合一環教育の場だ。その上にある大学部は個人の希望によって進学の有無が異なる。

様々な規則はあるが、その中でもっとも基本的な学則に制服着用の有無が存在する。

曰く、学院生は平日・休日に問わず制服を着用しなければならぬ。

もちろん、実際に休日に制服を着て歩く生徒は居ないが、平日の放課後。しかも学舎の中で私服を着用する生徒は、例外はあれど皆無と言っている。

この少女もその例外でなければ、真っ白の生地に着にビーズの星型刺繍の入ったワンピース。足元はワンピースの色に合わせたのか、足首に触れるアッパー部分が襟のように外側に折れた可愛い靴を履いている。

そんな少女は、反応の無くなったローラに不思議そうに一度首を傾げると、再度制服の裾を引っ張った。

「おねえ、ちゃん？」

この女の子が誰なのか？ 何故ここに居るのか？ ルーシィとど

ういう関係なのか？ 聞きたい事は多々あれどとりあえず――。

「力、カワイイ！」

本能の赴くまま、ローラは少女を心ゆくまで抱きしめる事にした。

「わ、ぷ！」

完全のオチで白目を向いて突っ伏しているルシエを忘れ、少女は突然抱きしめられて目を白黒させた。

2・サンシャ遺跡（前書き）

説明回です。長い説明が続くので、大丈夫な人だけどうぞ？

2・サンシャ遺跡

「とりあえず、説明していいの……かな？」

まだ何かに気持ち良く絞め落とされた感覚が残る喉元を擦りながら自席腰を下ろしたルシエは、机を挟んで椅子に座っているローラを若干疲れ気味のジト目で見据えた。

だが当の本人は何処吹く風。

それなりに力が入っている視線にも関わらず、手はシルバードロンドの髪を優しく撫で、時には髪型を変えていく。

尤もその髪は自分のではなく、膝の上に座らせた少女のものであるが。

「あ、うー……」

弄られている本人は、どうしていいのか分からず、呻きながら潤んだ子犬のような視線をルシエに向けた。

切実に助けたいと思う。

思っただが……。

背中に大量の汗をかきつつ、ルシエはそんな父性本能を擦られる視線から顔を逸らした。

その様子を見て、頭の後ろにトンカチで叩かれたような擬音まではつきり見えるくらいショックを受けた少女。

後ろめたさに後ろ髪どころか髪の毛全部を引っ張られる罪悪感が、今ならまだ間に合うと少女救出を促してくる。

しかしルシエは涙を流しつつ罪悪感を振り払った。

もちろん、少女に背を向けたままである。

咳払い一つ。

何とか心を持ち直すと半分聞いていないだろうローラに説明を始

めた。

「えっと、ローラはサンシャ遺跡についてどれくらい知ってる？」

「世間一般に知られてる程度なら……と。うーん、ツインテールも良く似合いますね」

くると少女の髪を手のひらで回し、頭の両サイドに同じ大きさの房を作り上げた。

自分の頭の上で何が起きてるのか不安なのだろう。

時折体を小刻みに震わせる少女に、ポケットから取り出した手鏡を渡すと、ローラが作った髪形をゆくりと映した。

恐る恐る渡された手鏡を覗き込み、そこに映し出された自分の姿に、目も口も大きな丸を描いた。

それがとても感動したのか、途端に少女の目に次を催促する色が浮かんだ。

「ふふつ。それでは……同じ系統でサイドポニーと普通のポニーテールに見ましようか」

どうやら仲良くなったらしい。

そんな様子に安堵を覚えつつ、とりあえず話を進める事にする。

「一応、世間一般について教えてくれる？」

「んー。髪の毛がふわふわだからかしら？ ポニー系はまとめると膨らみすぎるかも？ サンシャ遺跡は世界の文明が一度滅亡した千年前より昔に作られた遺跡で、宝探し屋や考古学者の入門にして、未だに謎が残っている知名度で言えば世界でも上位に入る遺跡です」

少女の髪型を思考しつつ回答するという器用な真似で質問に答えたローラに、ルシエは大きく頷いた。

「そうだね。千年前——『消失起源』が起きた時から存在すると言われている遺跡」

消失起源。

それは文字通り一度全ての文明が『消失』し、そこから人が立ち上がった『起源』を示す言葉だ。

世界は一度崩壊した。

それまで築き上げてきた人類の全てが一瞬で廃墟となり、突然襲ってきた自然現象によって風化したと言われている。それより千年経った今でも、原因不明の事件である。

サンシャ遺跡はその際に風化せず、その場に残り続けたという遺跡だ。

ただ『消失起源』より前は地上六十階の巨大な塔と言われているが、今では砂漠となった地盤が重さに耐え切れず、今では入り口を除く全てが砂の下に沈んでいる。

「それで？ そのサンシャ遺跡とこの娘がどう関係するんですの？ …… あ、折角ふわふわの髪なんですから、パーマ風にしてみましよう」

どこから取り出したのか、ヘアカーラーを少女に巻き始めた。

その様子が楽しいのか、遊ばれているのを止めようとせずに分の髪の毛が変わっていくのを期待して眺めている。足を前後に動かし、手鏡越しにローラの手を見つめている。

その様子をしばらく眺めてから、ルシエは重々しく口を開いた。

「サンシャ遺跡地下六十五階。僕が初めて見つけた新しい隠し部屋

の中で、その娘は寝てたんだ」

「……は？」

手が止まった。

ルシエの言葉の意味を頭の中で反芻し、何を言っているのか理解しようと頭が働くが、結論に理性が追いつかない。

そんなローラを少女は不思議そうに見上げた。

「何の冗談です？」

「冗談なら良かったんだけど、ね」

小さく頭を振りながら、机の上に一冊の本を置いた。

「僕はこの本に書かれていた内容から、地下隠し部屋を発見した」

本にはこう書かれていた。

——地上二階、卯の方角、二の上。それは転じて申の方角、五の下へと降る。

昔から学者間で隠し部屋へと通じる暗号と言われている一文だ。

だが卯の方角や五の下という言葉が何を意味するのか、それを裏付ける証拠は何も無かった。

ルシエにしても一文の謎を解いたのは偶然だった。

たまたま開いた過去の時間を記した歴史書の中に、一文に記載のあった卯や申と言った言葉が記載されていたのだ。それを調べてい

く内に時刻は方位を示した文献に行き着いた。

「……それでまた読めない書き置きをおいて暴走したと」

言われてみれば、残された書き置きは昔の東部地区でよく使われていたものだ。

それを教えてくれたのは、ここ考古学教室の教授先生だった。

でも、あの教授も一筋縄じゃいかなかったです……。

そんな心の眩きと一緒に、懷から飛んでいった数枚のお札と、そのお札が変化した古い本を抱えて嬉しそうにしている考古学教授の小躍りした幻が見えてしまい、そっと涙する。

「書き置きしたんだから、暴走じゃな……いや、何でもないです」

ジト目が睨みに変わり、そこに殺気が混じるや勝手に動いた口を手で隠す。

「ま、まあ、それはともかく、それで発見した隠し部屋の中に、長方形の箱が置いてあったんだよ」

「長方形の箱？」

「うん。部屋の壁にくっつくように置かれてたんだけど、それに触れたら箱が開いてさ。その中にその娘が眠ってたんだ」

何とも一概には信じられない話だ。

その話をそのまま信用するなら、今ローラの膝の上に座っている少女は、ルシエが発見するまでの間、誰も拠る事のない地下深くで生きていた事になる。

「でも、さすがにそれは……」

誰が見てもわかるくらい、困惑の色が浮かんだ。

「うん。いきなりは信じられないと思う。僕だって発見者じゃなかったらまずは疑ってたと思うから」

それでもこれは真実なのだと。

強い意志の籠った眼差しで少女を見つめる彼に、ローラは反論する言葉を飲み込んだ。

その代わりに溜息をついた。

「どっちにしても、この娘の生まれが不思議なのはわかりましたけど……。それにしたって、何でこの娘が学院に？」

「いや、いくら僕でもさすがに遺跡に置き去りはできないよ」

「じゃなくて、別に学院に連れて来なくても家に待たせておくとか色々と方法はあるじゃないですか。貴方はご実家暮らしですし」

「……泣く子と女の子には勝てないって、昔の諺知ってる？」

どうやら泣かれたらしい。

昔から考古学には滅法強い押しを發揮するくせに、その他全ての事象に対して受身しか取らないこの腐れ縁の同級生に本日何度目かの大きい溜息を漏らした。

そんなローラの様子に心配になったのか、少女が眉を八の字に顰めながら再度顔を覗き込んだ。

「なんでもないです」

苦笑気味に微笑み、優しく髪を撫でるとそれが嬉しいのかまた笑顔を零した。

「まあ今後どうするにしても、この娘の面倒はちゃんとみないと、ですね」

と、そこでローラはたとあることに気がついた。

「そう言えば、この娘は何と言うお名前なんですか？」

問いながら巻いていたヘアカラーを外す。

すると元々細くふわふわだった髪の毛先が内側に巻き、お嬢様風な雰囲気になった。

少女は巻いた髪を恐る恐る触れ、感じたことの無い感触に体を揺すって感動を顕にした。

「さあ？」

ルシエに駆け寄り、内巻きの髪を見せて飛び跳ねている少女に、良かったねー。と声をかけながら呟かれた言葉に、ローラは怪訝そうな表情をした。

「さあって聞いてないんですか？」

「聞いてないというより、付けられてなかった。って言うのかな。聞いてもわからないって言うんだ」

長い眠りの間に忘れたのか、それとも最初からないのか。どちらにしても、今楽しみに手鏡を覗き込んでいる少女は名前が

ないのだ。

同情とも何処か違う複雑な感情を抱きつつ、ローラは少女に歩み寄るとじっと見つめた。

「私がお名前つけていい？」

「な、まえ？」

「そう。お名前。私はローラ。あれはルーシィ」

「あれって酷いなあ……それに僕はルシ」

「貴女にお名前あるなら、教えて？ もしないなら、私がお名前つけてもいい？」

ルシィの抗議は耳すら通してもらえずスルーしてからもう一度、少女が理解するようにゆっくりと問いかける。

意味はわかってないかもしれない。

それでも、ローラの言葉に少女はゆっくりと、それでいて大きく頷いた。

その様子に同じように大きく頷くと、心に浮かんだ言葉を口にした。

「ユキ……ってどうかな？」

「ユ、キ？」

「そう。北の国で冬に空から降ってくる小さなふわふわなもの。貴女にぴったりだと思うんだけど？」

少女は何度も口の中で言葉を転がした。
そして――。

「ユキは、ユキなの」

少女――ユキは自分の名前を呼びながら、ローラに飛びついた。

2・サンシャ遺跡（後書き）

次回は1週間〜2週間位後でしょうか？ 良ければお付き合いくだ
さいませ。

3・トライアラー（前書き）

仕事の出張で、やっと落ち着いてきたと思ったらまだ移動……。次回も投稿が長くなりそうです。

3・トライアラー

「さて、折角だしユキちゃん連れて町でも案内しません？」

ルシエが二人を眺め、飽きて今回の調査旅行の結果を論文にまとめ始め、ちよつと肩が凝ったなと首を回し、さすがに目頭に疲労が溜まったなと指で揉み始めた頃、
ようやくユキから離れた満面の笑みを浮かべたローラがついと決定事項と言わんばかりに今後の予定を口にした。

「案内……？」

言われて視線が窓の外に向かう。

確か彼女が襲撃してきた時はまだ空の色は青だったと思ったが、今は見事な群青色だ。ついでに言うなら遠くに沈みかけている太陽が、帰路についている鳥の影を映していたりする。

「これから？」

さすがに疑問が零れる。

しかし問われた本人は仰々しく頷くと、擬音がつきそうな勢いで指を窓の外へ突きつけた。

「夜はまだこれからなのです！」

「いや、子供を連れて出歩く時間ではないような……？」

「保護者がいるから大丈夫です！」

それが間違いなく自分を指しているのだろうか。と、内心嘆息しつつ、絶対に言う事を聞かないであろう彼女を睨みながら仕方なく机を片付けるのだった。

「……って、町の案内というから名所でも回るのかと思ったたら、夕飯ですか」

学校を出てから数分。

何所へ行くのかとユキと手を繋ぎ、肩で風を切っていくローラに着いていったところ、辿り着いたのは行き付けの酒場『帰りの小鳥亭』だった。

王立聖皇総合学院は王都から少し離れた場所に、総合学府街として建設された。

そのため、下は七歳程の初等部から親元を離れて生活しているの
で、学生をターゲットにした安い飲食店が多く存在する。

ここ『帰りの小鳥亭』もそんな学生をターゲットにした深夜まで営業している飲食店の一つだ。朝から夕方五時頃までは未成年に居心地の良い空間と食事を提供し、それ以降はお酒も提供する酒場として常に学生の姿を見ることができる。

ルシエとローラも観葉植物が適度に配置され、雑多ながらも整頓された店の雰囲気を入り、懷に余裕があれば頻繁に足を運んでいる。

「こんな小さな子に名所周りに引つ張ったって、面白い訳ないですからね。それなら時間も時間だし、ご飯を楽しく食べた方が有意義というものです」

言っている事は正しいが何か釈然としない顔をしていると、見知

った顔が足取り軽く三人のついたテーブルに近寄ってきた。

「あら、珍しいじゃない。仕送りとお給料日が近いこの時期に顔を見せるなんて」

「こんばんは。ミリア」

さっぱりとした、くすんだ茶色のショートカットに、健康的な小麦色の肌と、それに釣り合う元気に満ち溢れている大きな黒真珠のような瞳を持った女性にしては大柄な体格のミリアは、トレイを手の代わりにあげた。

答えるようにユキ以外の二人も手を上げた。

そのやり取りは毎回行っている決まり事のようなものだが、ウエイトレスの視線は二人ではなく間に座っている小さなお客様を見ていた。

腕を組み、顎に手を当てて唸り声を上げながら席についている三人の顔を順々に眺める。そのまましばし唸った後、何か結論が導き出されたのか、ぱっと花が咲いたような満面の笑みを浮かべながら、手を打った。

「そっかぁ。学生結婚か」

「はい？」

全く予想外の言葉に疑問符が口を付いた。

「でも、前に来た時はローラのお腹そんなに大きくなかったよね？
ああ、そうか。ルシエの隠し子か」

「ってどんな勘違いですか！」

直接的な一言に、思わず顔を真っ赤にして否定する。
逆に肩透かしを食らったようにぼかんとしたのはミリアだ。

「違うの？」

「違います！」

ローラの勢いに身を引きつつ、ちらりともう一人の話題の中心に視線を向けると、水を溢して口元が汚れてしまったユキの顔を拭いているルシエの姿。

「でも相方は全然慌ててもいないけど？」

「貴方も否定してください！」

鼻先に指を突きつけられる。

これ、慣れない人だと面食らうよなあ。と指を除けて相方を見る。
そして大きな溜息をついた。

「んなっ！」

「まあいつもの事だし、放って置いていいかなと」

そんな言葉が口を付くくらい、毎度のやり取りとなっている二人の漫才に、周囲を見回すと他の常連客など酒の肴にしている始末だ。
ルシエに突っ込まれ、はっとなった瞬間、多数の好奇の視線が刺さってくるのがわかる。

意識してしまったたら顔の温度を数度上あげ、しおらしく小さく席に崩れ落ちた。

背もたれにぐったりともたれ掛かる本日出会った年上の少女に、ユキにしてもどこか楽しげな色を瞳に浮かべていた。

「ま、親子水入らずにちよつかい出す程野暮じゃないし、そろそろ注文ほしいんだけどいいかい？」

「ミリ……ぎゅむっ！」

「鳥の香味ソースかけ三つと、後はローラにチョコパフェ。ユキにオレンジジュースと僕にはコーヒーを」

「了解。ちよいと待つてて」

ローラが再び勢いつけて抗議の一声を高らかに宣言しようとした瞬間、ミリアが隣に座っていたユキを肩車よろしくひょいとローラの上に置いた。

おかげで中途半端になった抗議は、同じタイミングで注文したルシエに掻き消されて、周囲に以上新しい酒の肴を提供することなく霧散した。

その様子を笑い半分、営業スマイル半分でにこやかに注文を受けたミリアは、踵を返してテーブルの間を軽やかに擦り抜けながら颯爽と去っていく。

その姿が厨房に消えるや否や、潰されていたローラがうがー！と叫びながら復活した。

「重いじゃないですか！」

「ろー、起きた」

「起きたねー」

齒の隙間から荒くなった息が漏れる。

しかし、まるで仲のよい兄弟の如く和やかな雰囲気で笑いあう二人に、がつくりと肩から力が抜けた。

「はあゝ……。もういいです」

これ以上は何を口にしても無駄と悟り、崩れるように大人しく席に着いた。

水を一口飲み、ようやく落ち着いてきた気持ちと反対に、耳に届く周囲の喧騒が大きくなる。

日が完全に落ちて一刻は過ぎようとしている時間帯。

学業や部活を終え、仲間と一緒に明日への活力を得るために談笑している雰囲気は、心から完全にささくれだったものを取り去ってくれた。

無意識のうちに溜息が出る。

ちらりと視線を向けると、これだけの人が会話している雑踏は初めてなのか、ユキが興味深げに周囲を見回し、ルシエもそんな彼女を優しげに見つめている。

「……本当に従姉妹か何かじゃないのでしょうか？」

「ん？」

「何でもありません」

独り言に返事され、思わず頬に薄らと朱を加えて視線を反らす。と、そこで視界に映った四人の男性に、折角落ち着いた心が若干ながら再びささくれ立った。

「法政学部の人達だよ。お金落としてくれるからいいお客さんなんだけど、ちょっと過激だね」

そんなローラの視線に回答したのは、料理を持ってきたミリアだった。

「はい、おチビちゃん。熱いから気をつけてね」

「おー……」

目の前に置かれた料理に、ユキは目と口を同じ大きさに真ん丸く広げて感嘆の歓声を上げた。

その様子を笑顔で見つめながら両手に抱えた料理を三人の前に並び終えると、ミリアは再び法政学部の学生に目を向けた。

釣られてローラも見る。

「王は甘い！ 隣国では太古の遺跡発掘を密にし、国力の増強を考えているというのに、我国は数箇所の大学部にある考古学研究室に丸投げだ！」

「そうとも！ 過去の技術は国の……いや、人類の宝！ それを場合によっては他国に発掘を任せる事もあるなど、笑止千万！」

リーダー格と思える二人の意見に、残りの二人も拳を振り上げて同意を示す。段々と大きく、それでいて国批判を含んだ発言は、周囲で食事を楽しんでいる他人の渋い表情の一切を無視して交わされていた。

法政学部とは、文字通り法律と政治を勉強する学科だ。

卒業生は常に国の律法機関に就職し、国政の最先端を担っていく謂わばエリート予備軍だ。

そのためか、そこに所属する学生達も過分にプライドが高く、他の学部生に対して見下しており、校内でトラブルを起こす頻度も高い。

更に性質が悪いのは、所属している学生の大半が親が政治家や法律家と言った身分のため、選民思想をまるで空気を吸うが如く実践しているのだ。その嫌われ具合となれば、法政学部に知り合いがいると口にしただけで、その人物も毛嫌いされてしまうくらいだ。

今店で好き勝手論争を繰り広げている四人は、アルコールも多分に摂取しているのだろう。

火照った朱色の範囲が顔全体に及んでいた。

「まあ、関わらなければいいだけですから」

「そうなんだけどね」

「でも、ローラは見た目いいのに短気だから、いつ突っかかっていくのか不安で……ってごめんなさい。言い過ぎました」

危ない手つきで鶏肉に鬨いを挑み始めたユキをフルバックアップしながら口をついた軽口は、その一瞬後にルシエ限定で投げかけられた殺気に、即座に謝罪へと切り替わった。

「でも、あの人達も国を思つての意見だし、そこまで嫌な顔しなくても大丈夫な筈だから」

ユキのサポートが忙しく振り返りはしなかったが、口元に浮かんだ苦笑がルシエの本心の一端を示しているようだった。

甘いんですから。

見慣れた苦笑は、それでも納得のいかないローラの眉間に深い皺を刻みながら心の中でこちた。

「ま、そんな事より、折角の料理！ 冷めちゃう前に食べちゃって！」

その様子をミリアがぱんぱんと手を叩きながら払拭した。

自分を見上げているローラに、一度元気の良いウインクをすると、一人料理に手をつけて一口食べる毎に大きく口を開けて感動を示すユキの前にしゃがんだ。

「どう？ 美味しい？」

「うん。美味しい……」

「そっか。食べ終わったらジュース持ってくるから、それまでパパとママと仲良くご飯しててね」

「ちょっと！」

「じゅっくり〜」

最後にまたからかいの言葉を残すと、あっという間に逃げていったミリアに嘆息した。

するとその拍子に俯いた視界に、小さな真っ白い手が入った。

「ご飯、食べよ？」

「……そうですね」

顰められた顔が笑顔になる。

柔らかい髪を撫でると、ユキもまた笑顔になった。

「ルーシィ、そっちにあるドレッシング取ってもらえませんか？」

「はいはい」

頷き、そばに合ったドレッシングに――。

「グッ！」

伸ばした手は空を切った。

続けざまに上がった奇声に合わせ、ルシィがゆっくりとテーブルに倒れこんだ。

何が起きたの？

ユキが隣で倒れたルシィを見て、目を大きく見開く。

ローラもまた口が無意識に開き、必死に理解するべく思考を動かす。だが、理解が思考を埋め尽くす前に、目の前にソレが降ってきた。

鋭く、それでいて鈍い破碎音が、静まり返った店内に響いた。

ソレがアルコールの残った、割れたコップだと気づくまで数瞬を要した。

「……え？」

たった数分前まで笑っていたクラスメイトが、今は倒れている。震える手が彼の頭に伸びた。

そして触れた瞬間、崩れ落ちた髪の一房の隙間から血が流れた。

「キヤアアアアアアア！」

それが引鉄となった。

誰かが発した悲鳴に、店内が一斉に騒然となった。

「何だと！ 貴様、国王批判をするのか！」

「己だつて散々遺跡発掘について批判したじゃないか！」

「俺は国王の政策を転換してくださればと思っただけだ」

「俺もそうだ！」

その中で、ルシエの様子など一切関せず、立ち上がり互いの胸倉を掴み合う存在があった。

さすがに拙いと感じたのか、仲間二人は慌てて止めようとするが、そんな仲間すら腕を振り回し弾き飛ばす。それを合図に、法政学部二人の喧嘩が始まった。

「ちょっと、お客さん！ 喧嘩は困りますって！ やるなら外でやってよ！」

ちらりと視線でルシエの様子を確認しながらも、ミリアは先に原因となっている二人を止めるのが先決と割り切り、法政学科二人の間に突っ込んだ。

「五月蠅い！ 店のウェイトレス風情が口を出すな！」

しかし感情を高ぶらせ、且つアルコールによって肥大した本能は、相手が誰であろうと構わず暴力を振りかざす。

ミリアが小さい悲鳴を上げて床の上に投げ出され、それを見た残りの法政学科の仲間が、無責任にも文字通り尻尾を振って逃げ出したのを皮切りに、本格的な殴り合いに変貌を遂げた。

巻き込まれまいと慌てて店外に退避した他の客の中で、ローラは泣き出したユキとまだ起き上がらないルシエを守るように抱きしめていた。

しかし、ただの殴り合いだから危害は少ないとはならない。

完全に理性の箍が外れた学生二人は、次第に辺りの物を手に持ち始めた。

振り下ろされるたび、砕けた店内備品が周辺に撒き散らされる。

「は、早く外に非難しないと……」

その騒ぎの中、胸にしがみ付きしゃくり上げているユキと、打ち所が悪かったのか未だ呻き声を漏らすルシエの上でローラはそう呟いた。

一向に収集する気配を見せず、逃げ切つてない学生で入り口付近は混雑している。怪我人一人と幼い子供一人連れて逃げるには無理がある。

手伝ってくれそんな人間を探すが、ミリアの姿も見えない。誰かに連れ出されたのかもしれない。

少しずつでも引きずって脱出をするしかないですね。そんな考えに結論が出た時、不意に耳に風切音が聞こえた。

自分の動作すら遅く感じる速度で振り返る。

そして目の前にある物が何なのか理解した。

木目が直角に組まれて正方形を形成し、そこに木の板が貼られている物体。ついでにいうならこの店に沢山合り、客が腰を降ろしている物。

「あ……」

椅子かあ。

そんなあっさりとした感想が心に浮かんで消えた。

こんなものが命中したら、ルシエの怪我どころの騒ぎではない。
下手をするとそのまま、

（死んじゃいますね）

妙に心が落ち着いている。

それでいて最悪の結果が脳裏を掠めているのに、一向に何か行動
を起こそうという気にもならない。

そうして緩やかに飛来する椅子が自分に命中するのを見つめ――。

「やー！ るーも、ろーもいじめちゃ、やー！」

ユキの叫びと共に光が爆発した。

遠くから何かが聞こえた。

（ああ、五月蠅いな……。折角人がのんびり寝ているのに）

温かくずつとたゆたっていたい場所から強引に意識を浮上させら
れ、明らかに不機嫌な呟きを心の中でごちる。

意識が浮かび上がっていくにつれ、どんな雑音が把握する。
生理的に神経を逆撫でする雑音だ。

聞いているだけでイライラするというか、落ち着かないというか、
心をざわめかせる音が暗闇の向こうから耳朵を打ってくる。

暗闇？

そこでローラはようやく己が意識を失っていると気づいた。だが一体いつ自分は意識を失ったのか。瞬き程度はしていたが、失うと形容してもいい長さで目を瞑った記憶はない。

どうして記憶がないのかとしばし考える。しかし思考は寝起きのぼんやりとした靄のかかった様な感覚に邪魔され、一向にまとまる気配がない。

考えるより先に目を開け、状況を把握するのが一番手っ取り早いとややああって気づいたのは、それから数拍の間を要した。

結論が導き出されて、さて起きるかなと、ゆっくりと目を開き――

「……え？」

目の前に展開されている状況を、まだどこか靄の取れない頭が理解しなかった。

いや目の前の出来事はわかる。見たままを言葉にしろと言われれば一切の間違いなく言葉に変換させられる。だが理解できなかった。

……いや理解したくないのかもしれない。

出会ってまだ数時間ではあるが、見た目も中身もふわふわと柔らかく、その笑顔が温かいものであるとわかつている少女が、あんな事になっているという事実など。

「トライアラー」

眩きが聞こえた。

声の方向は自分の下だ。

見ると、粉々に砕けたテーブルや椅子の残骸の上に仰向けに倒れたルシエの姿あった。

ついでに言うなら彼女は彼の上に、同じく仰向けに乗っていた。

「――！」

声にならない悲鳴を上げつつ飛びずさると、ルシエは同世代の女子と密着していたという現実に関色一つ変える事なく、呆然と目の前の風景に心奪われている。

それは己も同じだった。

一度意識がソレに向いてしまったら、もう頭は何も考えられない。まだ店内には細かい埃が舞い上がり、粉々になった店内備品がある一点を中心点にして周辺に飛び散り、まるで爆心地のようになつた、陥没した床の上に座り込んでいる幼子。

頭の左右から二本の曲がった黒角を生やし、背中から生えた純白の羽根で自分の体を包み隠した、母親を求めて泣いている姿とだぶらせる程に、儚くか弱く見えるユキの姿があつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4659r/>

トライアラー

2011年10月8日20時27分発行